

平成 27 年度中学校武道授業(弓道)指導法研究事業



リーフレット作成検討協議の様子

平成 27 年度中学校武道授業(弓道)指導法研究事業〔主催＝(公財)日本武道館・(公財)全日本弓道連盟・日本武道協議会、後援＝文部科学省〕は平成 27 年 8 月 10 日～12 日の 3 日間、日本武道館(東京・千代田区)で実施された。

今年度の研究事業は、過去 5 回にわたって検討してきた「教育効果の上がる指導法の検討」に加え、「どのように弓道の魅力を学校現場に伝えるか」を中心とした検討協議を行った。全日本弓道連盟では今後、今回の研究内容を盛り込んだリーフレットの発行を予定している。

■1 日目(8 月 10 日)



三藤理事・事務局長

開講式の主催者挨拶で三藤芳生日本武道館理事・事務局長から「今年度の研究事業は日本武道館での開催となった。中学校武道必修化は 4 年目を迎え、内容の充実が求められる時期となった。7 月に開催した

弓道の全日本少年少女武道錬成大会では 87 団体約 1,300 名の中学生が全国から集まった。このような実績と弓道の魅力を必修化にどう結び付けていくか。指導法の研究とともにどのように採用校を増やしていくかを検討していただき、全国の中学生に弓道の素晴らしさを伝えてもらいたい。」と述べた。続いて、研究者を代表して桑田秀子氏が挨拶に立ち「日本武道館の協力のもと、指導法研究事業を継続して実施している。現在、採用校は 20 校に満たないが増加傾向にあ

る。出身地の栃木県でも外部指導者を活用した採用校が 1 校増えた。今回の研究事業では弓道の採択校を増やせるよう、皆様のアイデアをいただきながらリーフレット作成を進めていきたい」と今回の研究事業に対する意気込みを述べた。



桑田研究者

開講式終了後、さっそく実践例報告に移った。はじめに高橋研究者(岩手県・奥州市立水沢中学校教諭)から中学校現場での実践例報告があった。弓道授業が実現した理由について授業実践への誘いがあったこと、全日本弓道連盟から弓具の寄贈があったこと、外部指導者の協力が得られたことなどがあげられた。指導計画としては 3 年女子のみが行っているので男女共修は実施できていないのが現状である。平成 21 年から授業を実施し、授業成果を文化祭にて披露するなど生徒自身が積極的に弓道に取り組んでいると報告があった。

次に一原研究者(滋賀県・MIHO 美学院中等教育学校教諭)が昨年に引き続き実践報告を行った。報告後に「デメリットと考えていた校舎から弓道場までの距離については桑田先生の『運動量確保のための体力づくりとして』という発言からメリットとして考えを改めることが出来た。また授業実施時期についても冬場の実施は避けてきたが松本研究者をはじめ東北地方でもビニールを張って弓道場を保温するなどの工夫

で通年実施できることがわかった」など現場報告を述べた。

また、藤木研究者（福岡県・大牟田市立宅峰中学校外部指導者）からの報告では「4年間外部指導者として弓道授業を経験してきた。授業の中心はあくまで体育教員である。熱心な教員には弓道教室に通ってもらいながら、初段を取得できるレベルまで指導したことがある。現在では選択科目での実績が認められ、正課として実施できるまでになった。道場管理については地元弓道連盟が協力してくれている。弓道未経験の体育教員が弓道場で指導するのは危険が伴うのでルールを設ける必要がある。矢を放つぎりぎりの時数まで体育館での映像資料を活用しながら授業を進めている。学校現場を経験している方が外部指導者に一番適任だと思う」と外部指導者としての立場から意見を述べた。

■2日目（8月11日）



午前中は前日の実践例報告を踏まえ、グループ分けをし、弓道の授業採択に向けたリーフレット作成に時間を費やした。今回作成するリーフレットは大牟田市教育委員会が以前作成した「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践」を参考にして、実際に授業を受け持っている教員、外部指導者、連盟がそれぞれの立場から意見を出し合い、検討協議を行った。

午後はリーフレット全体における適切な表現は何か、行政への呼びかけに必要なキャッチフレーズは何か必要かを研究者全体で討議し、午前中に上がった情報の精査を行い1冊にまとめる作業を行った。

■3日目（8月12日）

最終日は指導の手引きのDVD映像の活用方法や今後の改訂版作成のための確認作業を行った。主に導入部分でのオリエンテーション



では、弓道の歴史や武道の特性について説明に使用していることが多かった。30～40人程度のクラス単位で、授業となると理解度に差が生じるので必要な部分の映像を繰り返し流して生徒自身が確認できるように使用しているなどの報告があった。他の資料との表現の統一や最新の映像をどう更新していくか、また更新頻度はどこまで対応すればよいかなど具体的な改訂内容にまで踏み込んだ検討がなされた。その後まとめに入り、初参加の藤木研究者から「当初13時間で弓道を指導するのは無理だと思っていた。しかし、指導法を工夫することで弓道の魅力を生徒が感じられるような授業が展開できると改めて思った。今回の研究協議内容を今後に活かしていきたい」と感想を述べた。

閉講式では桑田研究者から「参加研究者の皆様から貴重な現場の意見を聞くことが出来、内容の濃い研究協議が行えた。リーフレット作成という所期の目的を達成できたことに満足している。9月からは自分自身が外部指導者として弓道授業にかかわることになる。授業を展開する上で新たな課題が出てくると思うが弓道のすばらしさを中学生に伝えていきたいと思う」と総括を述べ、3日間の研究事業を締めくくった。

